

アンドレ・ジッドの方法 XII

——『インモラリスト』—そのマニュスクリを追って (2)——

鈴木 たけし

I. レ ジ ュ メ

方法XIに続き、ジッドの『インモラリスト』のマニュスクリを少しずつ追っていく。

今回は、第一部、I、pp. 51-56にとどめる。ミッシェルが友人たちに父の死とマルスリーヌとの結婚について語った後、新婚旅行に立つ部分。簡単に物語の流れをのみ要約する。内容から三段落に分ける。なおページ及び行数は拙論末のテキストのものとなる。

第一段落 p. 52 l. 1-p. 53 l. 16

ミッシェルとマルスリーヌは、新婚初夜をパリのアパートマンで過ごす。ここしばらくに起きた様々な出来事で、彼は疲れ切っていた。翌日、マルセイユから船出、チュニスに向う。船上でひまになったことで、彼はひさびさに想いをはせる。父との旅、とりわけスペインでの美しく明るい光景。しかし彼は、考えるよりむしろ視る。遠のくマルセイユを、そしてマルスリーヌを見つめる。今さらのごとく、彼女の美しさと優雅さに彼は驚いた。そのときまで、彼は妻を友人としてしか見なかったし、結婚によって人生が変わるなどとも考えなかった。今、モノログは終わったのだ。二人は抱擁する。接吻の味にあわれみを感じ、彼は涙を流す。話し始めると、女性の愚かさを信じていた彼だが、妻は自分より優っていると思う。彼女は、何と、固有の現実の生命もっているのだ。好奇にとらわれたように、夜、かたわらに眠る妻をいくどとなく見つめる。結婚が真実始まった。

第二段落 p. 53 l. 17-p. 54 l. 15

チュニスでミッシェルは、青春の神秘的感覚を感じ驚く。他方、疲れは重く、胸に奇妙な苦しみをおぼえる。とりわけ寒さが彼を悩ませる。風が二人を震えあがらせ、さらに車の揺れ、はげしい咳に、ミッシェルの疲労は深くなる。外の世界、眠る村と廃墟は、おそろしく広大にみえ、不吉だ。犬がおぼえる。やっと着いたホテルでは、みすばらしい二つのベッドがととのえられていた。

翌日も、全てがもの悲しい。灰色の空、かわらず寒風。前日、廃墟の一群がそうみえたように
 隠鬱な一日。疲労で彼の倦怠は増す。

第三段落 p. 54 l. 16-p. 56 l. 9

二人は夜出発、かわらず寒風と揺れが、ミッシェルを苦しめる。今や咳にかわり痰が出る。お
 びただしく出る。これで風邪がなおると彼は安堵する。しかし、ひどく疲れる。めまいがおそ
 う。まるで海の上、波のまにまに漂うようだ。

明け方、体を汚す血を見る。血を吐いたのだ。はじめ、妻に吐血をかくす。しかし彼はひどく
 弱っている。いらだちから、これは不当だと思い、惚けたように、吐血を妻に告げる。とたんマ
 ルスリーヌは失神する。それにミッシェルは、エゴイズムそのものの言葉を吐く。

軍医が呼ばれる。ミッシェルの病は重い。横たわる彼に、部屋がみにくくいたましくみえる。
 かたわら、マルスリーヌは美しい。彼女は、彼が癒えるとはっきり言う。そのとき彼は、妻の人
 生にたいする愛を思いながら、悲壮な美しさのイメージを奇妙にかいまみる。

妻は夫の看病に、はげしい愛でもって専心する。彼は、その愛につつまれながらも、死んだよ
 うにビスクラに着く。

II. テキスト分析

『インモラリスト』第一部、第一章は読みづらい。文章がことさら難しい訳ではない。単純過
 去、接続法半過去の頻出する文章体であるとしても、さほど難しくはない。当然、物語の導入部
 は、読みやすい方が読者にとってよい。作者もそれを意識しているようにみえる。簡潔な古典的
 文体は、完全といえる。にもかかわらず、読みづらい印象を私はもつ。他の理由があるのではな
 いか？ それを考えてみたい。

まず、特徴ある語、句、文を段落ごとに整理してみる。頻出する語句は、一つの段落で一回で
 あっても、三段落全体の中でくりかえされる場合がある。なお、ページ数、行数は拙論末のテキ
 ストによる。

1. 同一、同種の語、句、文の頻出。同種、同意の語、句、文の並置、あるいは、並置を意味
 する語、句、文。反対の意味をもつ語、句、文の並置

第一段落

pour la première fois : はじめて。同一語の頻出。p. 52 l. 9, l. 10, l. 20, l. 25, l. 33

brusquemert : 突然。「はじめて」と同種の意味の語として頻出。p. 52 l. 19, p. 53 l. 4

avec nouveauté : 新たに。同上と同種語。p. 52 l. 23

pitié nouvelle : 新たな (憐憫)。同上と同種語。p. 53 l. 4

deux chambres : 二つの部屋。並置を意味する語句として他の段落に頻出。p. 52 l. 2

tous deux seuls : 二人だけで。並置を意味する語句として他の段落に頻出。p. 53 l. 2

plusieurs fois : 何度も。p. 53 l. 11, l. 11

……sur ma couchette, sur l'autre couchette

並置を示す文。p. 53 l. 12

d'indispensable emplette : 不可欠な (買い物)

l'indispensable émotion : 不可欠な (感動)

同一語のくりかえし。p. 52 l. 3, l. 5

Vous le savez, vous l'avez vu : あなた方もそれを知っているし、あなた方もそれを見ていた。

同種の意味の文のくりかえし。p. 52 l. 22

J'avais vécu pour moi ou du moins selon moi : 私は、自分のため、少なくとも自分にしたがって生きてきた。

同種の意味の語句のくりかえし。p. 52 l. 35

第二段落

nouvelle sensation : 新たな (感覚)。第一段落に続く同一語のくりかえし。p. 53 l. 23

masse lugurbe des ruines : 隠鬱な (廃墟の一群)。

un jour lugurbe : 隠鬱な (一日)。同一語のくりかえし。p. 53 l. 41, p. 54 l. 5

……*légèrement vêtus tous deux, n'avions-nous emporté qu' un châle* : 二人は軽装で、一つのショールしか持って来なかった。

並置を示す語句とそれを否定する語句。p. 53 l. 33

les deux lits misérables : 二つの (みすぼらしいベッド)。並置を示す語句。p. 54 l. 1

第三段落

deux chambres : 二つの (部屋)。並置を意味する語。p. 55 l. 1

thé pour nous deux : (私たち) 二人 (のためのお茶)。並置を意味する語。p. 55 l. 3

plusieurs fois : いくども。第一段落にある。p. 55 l. 3

語、句、文の上記の特徴から、大方、次のことが察せられる。

「はじめて」、「突然」、「新たな」、(9回)何か変化が起り、それは妻、マルスリーヌの発見から生れ、期待や希望にあふれ、ミッシェルは「いくどとなく」その変化を確かめる。ただし「二人」は、「二つの」部屋やベッドにより、あるへだたりをっもっている。第二段落で「新たな」感覚が生れるが、むしろすぐに「隠鬱」になり、二人は一つのショールしかなく、二人をへだてるベッドもみすぼらしい。第三段落では、二つの部屋も二人のお茶もミッシェルの病により、むしろ二人の共存関係が失なわれていくことを示す。マルスリーヌの存在のみ「いくども」確かめられるが、ミッシェルは、かたわらきえてゆく。

2. 肉体的、精神的弱さを示す語、句、文 (驚き、自嘲、自失、理解不能などを含む)

第一段落

étourdissement : 精神的困惑、めまい。p. 52 l. 5

(*m'avait*) *épuisé* : 疲れ切った。p. 52 l. 7

fatigue : 疲労。p. 52 l. 7

gauche et stupide : 不器用でばかな。p. 53 l. 9

第二段落

(ma) sottise : おろかさ。 p. 53 l. 17

étonné : 驚く。 p. 53 l. 25

ahuri : 啞然とした。 p. 53 l. 25

(ma) fatigue : 疲労。 p. 53 l. 27, p. 54 l. 7

puérile confiance : 幼稚に信じたこと。 p. 53 l. 33

trarsi : (寒さで) ちぢこまった。 p. 53 l. 37

exténué : 衰弱しきった。 p. 53 l. 37

(mon) ennui : 倦怠。 p. 54 l. 7

pâle : 青白い。 p. 54 l. 14

mystérieuse jeunesse : 神秘的な青春。 p. 53 l. 25

un trouble étranger : 奇妙に気になるもの。 p. 53 l. 28

第三段落

brisé : 疲れで打ちのめされた。 p. 54 l. 17

(me trouvais) mal : 気分が悪い。 p. 54 l. 28, p. 55 l. 14

fatigué : 疲れた。 p. 54 l. 17

vertige : めまい。 p. 54 l. 31

avec stupeur : ほうけて。 p. 54 l. 36

taché : 汚された。 p. 54 l. 39

(comme) distraitement : ほうけたように。 p. 55 l. 8

très faible : とても弱っていた。 p. 54 l. 27, p. 55 l. 3, p. 55 l. 14

tremblait (de fièvre) : 熱でふるえた。 p. 55 l. 19

(était) atteint (gravement) : 重く冒された。 p. 55 l. 12

(il me) condamnait : 病人を見放す。 p. 55 l. 24

(Je n'eus) pas un sursaut : 力がでない。 p. 55 l. 24

las : くたびれた。 p. 55 l. 24

(Je) m'abandonnait : 気力を失なった。 p. 55 l. 24

(Je suis comme) un moribond : 瀕死のように汗をかいた。 p. 56 l. 8

(J') étouffais, perdais connaissance : 息をつまらせ意識を失なった。 p. 56 l. 8

(comme) mort : 死者のように。 p. 56 l. 9

精神的弱さと肉体的疲労が、第一段落で意識され、妻とのかかわりでも自己の劣性を認めはじめ。第二段落では、自信を失なうような表現、他者に対する自己の受動性を示す表現、そしてとりわけ、自然（気候）が彼を苦しめる表現が続出する。第三段落では、病人となったミッシュェルの肉体的精神的衰弱を示す語句で充満し、とりわけ名詞、形容詞から動詞表現が、加速度的に、彼を死へとみちびくようだ。

3. 以上の語、句、文の特徴をふまえ、始めの問、なぜ、この章が読みづらい印象をうけたかを考えていく

第一段落

まず読者は、新婚旅行に立つ二人という希望にあふれた語りを期待する。だが、新婚初夜には「二つの部屋」(p. 52 l. 2) が奇妙にも用意される。同一の形容詞「不可欠の」(p. 52 l. 3, l. 7) が、買い物と新婚の感動を修飾する。この語 *indispensable* は、古くは「義務的」の意をもつ。彼を「疲れさせた」*épuisé* (p. 52 l. 11) 原因が二つあげられる。父の喪と新婚だ。だが父の喪は、なぜか、新婚の感動より現実だとミッシェルはいう。そして、新婚旅行と重ねあわされる過去の思い出、スペイン旅行は、「すみきった空、すずしい影、祭り、笑いと歌」(p. 52 l. 16) とロマン派のときに月並みな詩句のように形容される。新婚旅行は、むしろ無感動で始まっている。

次に、ミッシェルは、妻の美しさに気づく。今さらのごとく彼女を視つめ、はじめて美しさに気づく。理由として、子供るときから共に成長するという親しい関係をあげる。しかし、二度くりかえされる聞き手の友人たちへの言葉、「(彼女の美しさについて) あなた方もそれを知っているし、あなた方もそれを見ていた」(p. 52 l. 22) から判断すると、常に側で見ている者が、逆に、彼女の美と優雅さに気づかないはずはないとも言える。なめらかな文体が、意味を上手に導いていくが、矛盾し説得に欠ける意味が、奇妙に平行し重ねあわされていく。またさらに、彼女の美しさの描写になるはずの続く文 (p. 52 l. 26-l. 29) では、単に彼女の服装、髪の色そして健康とが語られるだけだ。

二人の愛情関係は、一見、確かめられたようだ。ミッシェルの視覚を通して、ついで聴覚(対話)を通して、彼女の存在感が確かめられることで、愛情が目覚めたかのようにみえる。今までは、「みせかけの熱意のない」愛 (p. 52 l. 31), 「冷めたい心づかい」(p. 52 l. 32) しか彼女にだいていなかった。なぜなら彼は、「自分のため、むしろ自分にしたがって」(p. 52 l. 35) しか生きてこなかったからだ。そして、彼女を友人としか認めず、結婚によって人生が変わるなどとも考えずに結婚したと彼はいう。この文 (p. 52 l. 36) は、二つの *sans* (……せずに) で並置されている。まるでマイナスかけるマイナスがプラスになるかのように、愛情関係が確かめられていくようにみえる。

しかし、初めての口づけは、「突然に」(p. 53 l. 4) 「一種のあわれみ」(p. 53 l. 4) を彼にいだかせるにすぎない。その感動は、あわれみにふさわしく涙となる。

モノログが終り、会話が始めると、ミッシェルは自分の方が、妻より愚かであると思う (p. 53 l. 9)。それまで父の死が現実であったミッシェルは、となりのベッドにやすらかに眠るマルスリースが「固有の現実の生」(p. 53 l. 10) を持つことに気づく。並置されたベッドの片側から、

彼は好奇心な目で彼女を視つめる (p. 53 l.12)。しかしそこに、傍らにへだてられてマルスリーヌという「物」が置かれているような印象を私はおぼえる。

翌日、空は晴れ、海は静か。自然のおだやかさが、二人の未来の幸せを感じさせるように第一段落は終る。

この段落で「はじめて」*pour la première fois*, あるいは「突然」*brusquement*, あるいは「新たに」*avec nouveauté* が、9回くりかえされ、新たな人生の出発と感動を強調する。しかし、不自然で説得性がない意味、矛盾する意味、あるいは意味のない意見、無意味が、気づかれにくい、いたるところにみることができる。安定しているようにみえる文に、実は不安定な内容がしのびこみ、読者をいらだたせる。これが、私の読みづらさの印象の一つの理由のように思える。

第二段落

チュニスでミッシェルは、自己の内に密められた青春の感覚がめざめるのを感じる。しかし、彼はそれに、驚き、啞然とする (p. 53 l.25)。そして喜ばしいのは、自分でなくマルスリーヌの喜びであると彼はいう。目覚める感覚は、すぐに彼の主体からのがれさる。第一段落から、すでに徐々に、彼の精神の衰弱があらわれている。この段落では、さらに肉体の衰弱が重くなる。彼は、疲れ、咳をし、胸には奇妙な物 (p. 53 l.28) を感じる。「神秘的青春」(p. 53 l.25) は、そこで失なわれる。

さらに、厳しいアルジェリアの気候がミッシェルをおそう。

「しかし、この寒さは！……

風が吹き始めた。風は野に吹きあれ、吠え、唸り、車の戸口のすきまから入りこむ。何もふせげない。私たち二人は、凍えて到着した。私はといえば、車の動揺により、さらにもっと内からつきあげるひどい咳でひどく疲れた。……

村は眠っていた。はてしない広がりに見える夜の中に、廃墟の不吉な一群がぼんやりとかいま見える。犬が遠吠える。」(p. 53 l.33-l.41)

彼をとりまく外側の世界、自然や物が、さらに体の内部からあの「奇妙な」異物が胸で動めくように、咳が彼をおそい苦しめる。宿に着くと、へだててはいたが、二人を共に横たえるベッドは、みすぼらしい (p. 54 l.1)。その翌日も、空はどんよりとし、みはるかす灰色で、寒風はかわらず吹き続ける。寒風は彼の心の内部にもふきこみ、前日の廃墟の一群が不吉であったように、不吉な一日 (p. 54 l.5) となる。

第二段落では、ミッシェルは自信喪失におちいる。それを受動性といってよいだろう。そんな

彼に、自然や事物が凶暴に襲い暴れまわる。したがって、読者をいらだたせる巧妙な文はきえる。

かたわらマルスリーヌが、夫と対照的に自律し、静かな生を呼吸している。

「何て悲しい一日だ！ きみもひどく退屈だろう」と私は彼女に言った。

「いいえ、このとおりに読書をしているわ」

「……少なくとも、寒くないかい」

「それほどでも、あなたは？ まあ、あなた真青だわ」

「いいや」(p. 54 l. 11-1. 15)

第三段落

夜、かわらず風がふきあれる。車が動きはじめるや、動揺でミッシェルは疲れきる。彼は、目まいにおそわれる。海上を漂流しているように思う。彼は流され、病と死にむかうようだ。咯血する。この過程で、自然の激しい動きと、吐血までの病の記述は、読者にとって、自然でなめらかだ。

しかし宿につくと、二つの部屋 (p. 55 l. 1) が用意されている。第一段落のパリのアパートマンと同じだ。並ぶベッドではなく、別の部屋になったのは象徴的だ。二つの並置は、否定的な面、対立する意味をもちはじめよう。

はじめ彼は、妻に咯血をかくそうとする。がなぜか、それが「不当」とミッシェルは思う。これは、正当とか不当という判断にそぐわない問題にみえる。したがって、「本能的に」、あるいは「ほうけたように」(p. 55 l. 8)、彼は咯血を妻に告げる。さらに、奇妙にねじまがった形で、ミッシェルの自己があらわになる。妻が咯血を聞き、失神したことに彼は怒る。「この私が病気だけでたくさんだ。」この言葉で、「私」には強調形 *moi* がつき、さらにテキスト中、イタリックとなり強調される。しばらく失なわれていた「私」があらわれたのだ。しかし、彼は、ひどく弱っている (p. 55 l. 3)。むしろ彼は、「力なく、つかれ、気力を失ない」(p. 55 l. 24) まさしく自己を投げだしていた。マルスリーヌとの口づけに感じた「あわれみ」が自身にむけられるようだ。他方自然は、物(部屋)のみにくさとなり、かわらず彼を苦しめる。

かたわらマルスリーヌの存在は、官能をもって見つめられるほど、強い存在となる。彼女の慰めの言葉「あなたは治るわ」は、確信にみち、ここに奇妙な表現が続く。「生命にたいする彼女の愛」について思いながら、ミッシェルは、彼女の「悲壮な美しさのイメージ」をいただく。これは、不吉な想像だ。

彼女は、その後、彼の看病に専念する。彼は、全くマルスリーヌに身をゆだねる。ここで、二つの気にかかる文がある。ひとつは、「何という愛の激しさによって、彼女は私をスースから出

発させたか」(p.56 l.2)「はげしさ」は *violence* が使われ、「出発させる」は *faire quitter* という使役。むしろ *femme violente* (凶暴な妻) と *homme faible* (弱い男) を連想するのは、無理だろうか。今一つ、彼女があらゆることに奔走し、彼の世話をする記述の後、ミッシェルはこう語る。「残念なことに！ 私の旅行がひどくないものにするには、彼女にも出来なかったのだ。」解釈のしようにもよるが、彼女の努力、あるいは強さへのあてこすりにもとれる。とにかく生きてミッシェルは、ビスクラに着いたのだから。

このように第三段落は、後半、やはり読者にとまどいをいだかせる部分が所々にある。作品の悲劇性を、これから起る物語中の未来をかいまみさせるためともいえる。が、それだけではない何かを秘めているように思える。簡潔でなめらかな文体が、ミッシェルとマルスリーヌの愛の目芽を語り、不幸にも旅路で病にたおれた夫への妻の愛にあふれた看病を語る。しかし細部を見ると、いたる所、表面上の物語を不安定な矛盾にみちたものにする表現がみられる。ひとつの論理が、自然に進むように見えながら、それを否定し、非論理化する文体、文体は完成していくが、内容は密かに破綻していく。これが、私のいただいた印象、読みづらさ、いらだちを説明してくれるかと思われる。

III. マニユスクリの分析

さて、以上のようなテキスト分析をふまえて、テキストとマニユスクリとの関わりについてみたい。前述のテキストによる特徴にそって、マニユスクリが書きかえられテキストとなったものも少なくない。その例には、※をつけた。がまた、文体上の問題から書きかえられた部分も多い。識者には笑止すべき面が多々あると思うが、何故書きかえられたかを、私の仏語能力の範囲内であえて類推してみた。さらに、単に文体をととのえるために書きかえられたものは、フランス古典主義のひそみにならない、漠然と明確化あるいは簡潔化：*(style) clair ou simple* と附記した。また書き言葉としての文章体への書きかえなどは、上品な文体ということで *(style) soutenu* とした。これらも識者のご批判をうけることになるだろう。しかしいずれにしろ、あえて書きかえの理由を想像し、それぞれにつけてみた。

ページ数、行数は、拙論末のテキストのものである。始めにマニユスクリ文、次に矢印によりテキスト文を記した。マニユスクリ→テキスト。書きかえが2回以上あるばあい、最後の文がテキストとなる。マニユスクリで線などにより消された文、黒くおおわれたものもすかして見ることによって再現した。これらは×印で示した。/×…/。

※p.52 l.2 ナン

→ *Où l'on nous avait préparé deux chambres*

密かに二人をへだてる。

p. 52 l. 2 Nous n'y restâmes que de faire quelques indispensables emplettes.

→ Nous ne restâmes à Paris que le temps qu'il fallut pour d'indispensables emplettes.
soutenu

p. 52 l. 3 nous nous embarquions aussitôt.

→ nous nous *embarquâmes*
aussitôt が passé simple を決定。

※p. 52 l. 5 Les soins urgents, les *soucis* de ces derniers événements si rapides, l'indispensable émotion du *mariage* venant si tôt après celle plus réelle de mon deuil, tout cela m'avait épuisé.

→ Les soins urgents, *l'étourdissement* des derniers événements trop rapides, l'indispensable émotion des *noces* venant si tôt après celle plus réelle de mon deuil, tout cela m'avait épuisé.

soucis より étourdissement の方が, ミッシェルの精神的弱さを示すことができる。まさに新婚旅行の出発時であるから nocés がてきせつ。

※p. 52 l. 8/×Enfin l'inaction forcée/

→Le loisir obligé

l'inaction forcé の方が, ミッシェルの弱さ, 受動性を示すが, ここでは, 単に船上での無為を示す故, loisir obligé となった。

p. 52 l. 9 Je ne l' (=réfléchir) avait pas fait depuis longtemps. A vrai dire/×je ne l'avais jamais fait/ce jour-là, si tôt que je commençai de réfléchir, il me semble que c'était la première fois.

→ (次の文以前, 全て削除) C'était, me semblait-il pour la première fois.
simple et clair

※p. 52 l. 10 ……je consentais d'être *distrain*t longtemps du travail.

→……je consentais d'être privé longtemps de mon travail.

p. 51 (Pléiade : p. 374) j'étais à ce point *distrain*t. に続き, ミッシェルの精神的弱さ, 受動性

を示す *distrain* を始め使ったが、テキストでは、補語 *de mon travail* にふさわしい *privé* にかえた。

p. 52 l. 11 *Jusqu'alors je ne m'étais donné que de courtes vacances.*

→ *Je ne m'étais accordé jusqu'alors que de courtes vacances.*

soutenu

※p. 52 l. 17 ……., *de fêtes et de chants rencontrés*

→ *de fêtes, de rire et de chants*

月並みな形容で過去の旅を凡様なものにする。

p. 52 l. 17/× *Au départ de/Voilà, pensais-je ce que nous allons retrouver.*

→ *Voilà ce que nous allons retrouver, pensai-je?*

clair et simple. 時制も半過去から単純過去にすることで, *voilà* ふさわしい。

p. 52 l. 18 (テキスト *pensai-je.* と *Je montai* のあいだに挿入) *Nous étions à la fin d'octobre./×Ce fut ma première pensée/Le temps était splendide.*

→ 全文削除

p. 52 l. 18 *J'étais sur le pont……*

→ *Je montai sur……*

次々と起る状況の記述。

p. 52 l. 23 *Je la connaissais depuis trop longtemps pour la voir avec nouveauté.*

→ *Je la connaissais trop pour……*

simple

※p. 52 l. 24 *Je m'étais habitué à sa grâce.*

→ *J'étais habitué à……*

ミッシェルの受動性をまさしく動詞受動態で示す。

p. 52 l. 25 ……*cette grâce fut si grande*

→ *cette grâce me parut grande.*

※p. 52 l. 26 Sur un très simple chapeau

→ Sur un chapeau
simple

※p. 52 l. 28 d'un beau châle écossais

→ d'un châle écossais
simple

p. 52 l. 34 Elle me regarda……

→ A son tour elle me regarda

p. 52 l. 37 ……sans songer……que, de notre union, ma vie *pût* être changée.

→ sans songer……que ma vie pourrait être changée.
sans songer que を sans que subj. と誤用したためか。

※p. 53 l. 1 Je *commençais* de comprendre à *présent* qu'il (elle?) allait commencer le dialogue.

→ Je *venais* de comprendre *enfin* que là cessait le monologue.

明確な clair, simple, soutenu. また que 以下の大切な文を強調するため前文の簡潔化。

※p. 53 l. 2 ナシ

→ Nous étions tous deux seuls sur le pont.
並置を意味する文を加えた。

p. 53 l. 2 Elle/×appuya/son front/×sur mon épaul/

→ Elle tendit son front vers moi.

p. 53 l. 3 (elle leva les yeux の後に挿入) /×je m'assurai que/comme nous étions seul sur le pont.

→ ナシ
clair et simple

※p. 53 l. 3 je l'embrassai sur le *front* et sentis brusquement, à la *douceur* de mon baiser

une sorte de pitié *tendre*.

→ je l'embrassai sur les *paupières* et sentis brusquement, à la *faveur* de mon baiser, une sorte de pitié *nouvelle*.

front から *paupières*, douceur から *faveur* とより直截な表現となり, とりわけ *tendre* から *nouvelle* にして, 新たな感覚の目覚めにふさわしいものに文をととのえた。

p. 53 l. 5 Je m'étais fait, comme je pus d'avance, quelques idées sur l'intelligence imparfaite des femmes

→ …… , comme je l'avais pu, quelques idées sur la sottise des femmes.

clair, simple et soutenu

p. 53 l. 10 (Ainsi donc……の前に挿入) Cette nuit je me reveillai plusieurs fois sentant……

→ 削除

※p. 53 l. 10 ……celle à qui j'attachais ma vie avait/×son existence/sa vie propre et réelle! Ma nouvelle pensée……

→ ……celle à qui j'attachais ma vie avait sa vie propre et réelle!

L'importance de cette pensée……

p. 53 l. 18 rien dans ce pays neuf m'attirait que quelques ruines romaines

→ ……m'attirait que Carthage et quelques ruines

p. 53 l. 19 Timgad, dont ××× (現文のまま) m'avait parlé, Cartage, les mosaïques de Tousse……

→ ……dont Octave m'avait parlé, les mosaïque de Sousse……

p. 53 l. 20 ……l'amphithéâtre d' El Djem, où je voulais courir sans retard

→ ……où je me proposais de courir……

p. 53 l. 21 puis de Sousse prendre la diligence ; je/×pensais/voulais que rien d'ici là ne /×put/×pouvais/×mériter/×valoir/fut digne de m' occuper.

→ je voulais que rien d'ici là ne fût digne de m'occuper.

動詞, 不定詞の書き換えが興味深い。

p. 53 l. 23 Au toucher de nouvelles sensations je *supportais* telle parties de moi,……

→ Au toucher de nouvelles sensations s' *émouvait* telle parties de moi……

émouvoir : Vieux ou littérature

1. mettre en mouvement→Agiter, ébranler, mouvoir.

2. Agir par une émotion plus ou moins vive.

Pour émouvoir l'homme il faut bien quelque chose ; désir, plaiser, ou besoin (Gide).

(Petit Robert)

supporter より émouvoir の方が動的である。

※p. 53 l. 26 (C'était la joie de Marceline. の後に挿入) Elle n'aurait jamais voyagé

→ 全文削除。

よけいな説明をさけ, 前文の重要さを強調。

p. 53 l. 27 j'eusse trouvé

→ ; mais j'eusse trouvé

※p. 53 l. 28 Je toussais et sentais *dans ma* poitrine un trouble étrange

→ ……*au haut de la* poitrine……

p. 53 l. 30 ……au soir à huit heure

→ le soir à huit heure

à のくりかえしをさける。

p. 53 l. 30 elle (la diligence) /×arrive à/×passe/traverse El Djem *vers* une heure du matin.

→ elle traverse El Djem *à* une heure du matin

※p. 53 l. 33 Par quelle *inpardonnable* confiance

→ Par quell *puérile* confiance……

ミッシェルの受動性を示す。

※p. 53 l. 34 n'avais-je pris pour nous deux qu'/×un/×deux/grand/×châles/châle

→ n'auions-nous emporté qu'un châte.

二人のショールが一つか二つかに迷うところが興味深い。

P. 53 l. 36 ……chaque fente *de la voiture*

→ ……chaque fente des *portières*.

clair

p. 53 l. 38 ……et par l'horrible toux qui me secouaient encore plus

→ ……et par *un* horrible toux qui me *secouait* encore plus

人称の数の誤まり。

p. 53 l. 40 La diligence était partie

→ La diligence repartait.

※P. 53 l. 40 Le village était endormi ; et la nuit paraissait immense, (on) entrevoyait confusément la masse/×énorme/ *lugurbe* des ruines.

→ Le village était endormi ; dans la nuit qui paraissait immense, on entrevoyait vaguement la masse *lugurbe* des ruines ;

soutenu. *lugurbe* 「不吉な」は, énorme よりてきせつ。

p. 54 l. 3 Nous fûmes surpris……de voir un ciel *complètement* gris.

→ ……un ciel *uniformément* gris

p. 54 l. 4 (前文の後に挿入) il étaient/×entre/contre nous légère et immense voil.

→ 全文削除

p. 54 l. 8 ……par *ennuie*, j'y revins,……

→ par *désœuvrement*, j'y reviens

この前文に *mon ennui* があるので, くりかえしをさける。

p. 54 l. 9 ……un livre anglais qu'elle avait pris avec elle

→ ……qu'elle avait par bonheur emporté.

p.54 l.14 (前文の後に挿入) “N’as-tu, dit-elle, rien trouvé qui t’intéresse.”——Non, rien.

→ 全文削除。

clair et simple

p. 54 l. 14 (Et toi ? の後に挿入) ——Moi, je suis/×trés/fatigué

→ 全文削除。

clair et simple

p. 54 l. 14 (tu es tout pâle の後, 挿入) Tu n’es pas malade au moins, dis ?

→ 全文削除。

clair et simple

p. 54 l. 17/×Qu’est-ce que/Que

→ Que

p. 54 l. 18 Marceline……s’endormit vite *dans son cou*.

→ ……sur mon épaule

p. 54 l. 18 (前文の後に挿入) /×La nuit était trop obscure pour que je puisse voir autre chose/

→ 全文削除。

clair et simple. よけいな記述。

p. 54 l. 19 *Mais* je ne toussais plus,……

→ *Cependant* je……

p. 54 l. 21 cela venait par petits coups, *et par réguliers intervalles* ;

→ ……, à intervalles réguliers.

clair et simple.

p. 54 l. 21 C’était une sensation si *nouvelle*……

→ ……si bizarre

新たに感じるものとして、 *nouvelle* を使おうとしたが、病の症状としては、 *bizarre* の方が
てきせつであるし未知の不安もあらず。

p. 54 l. 22 *mais je fus très resté/×dégouté/écœuré par/×l'horrible/le gout inconnu.*

→ *mais je fus bien vite écoeuré par le goût inconnu.*

clair, simple et soutenu.

p. 54 l. 27 (線に囲まれて余白に) *Soudain je fus pris d'une atroce faiblesse.*

→ *Soudain je me sentis très faible ;*

p. 54 l. 28 (Vais-je la réveiller? の後に挿入) *pensais-je*

→ 削除。

p. 54 l. 30 *Je me repris, me cramponnai, /×me rendis maître. /×D'ailleurs/j'avais arrêté
de cracher.*

→ *Je me repris, me cramponnai, finis par maîtriser mon vertige.*

clair, simple et soutenu.

p. 54 l. 32 ナシ

→ *Mais j'avais cessé de cracher*

なお、l. 18—l. 20, *Vais-je la réveiller* から *finis par maîtriser mon vertige* は、線に囲まれ
余白に書かれている。

p. 54 l. 38 *Ma première pensée plus forte aussitôt fut de cacher ce sang à Marceline.
J'en étais tout tâché ; mes doigts surtout. J'aurai seigné du nez……*

→ *Ma première pensée fut de cacher ce sang à Marceline. mais Comment?*

J'en étais tout tâché……surtout. J'aurai seigné du nez……

clair et simple

p. 54 l. 41 *nous arrivâmes*

→ *On arriva*

p. 55 l. 1 Mes deux chambres étaient gardées

→ On nous avait gardés deux chambres.

p. 55 l. 1 ナン

→ Je pus m'élancer dans la mienne.

p. 55 l. 1 Je pus laver, faire disparaître le sang.

→ laver, faire disparaître le sang.

p. 55 l. 4 charmante

→ souriante

p. 55 l. 4 , une sorte d'irritation *grandit en moi*

→ une sorte d'irritation *me vint*.

soutenu. 後述の *cela grandit* との同一動詞のくりかえしをさけるため。

p. 55 l. 7 mon irritation grandissait et s'affirmait comme un instinct.

→ *cela grandit en moi* comme un instinct

p. 55 l. 17 Elle n'eut *pas un mot*, pas un cri ; simplement elle devint plus pâle et tomba…….

→ Elle n'eut pas un cris ; simplement elle devint plus pâle, *chancela, voulut se retenir*, et tomba…….

p. 55 l. 16 ……une lettre d'introduction *pour un des officiers de la ville* ; /×Sousse/

→ ……*auprès d' un officier de la ville* ;

p. 55 l. 18 à présent elle/×fut/×semblait/était.

→ ……elle était

p. 55 l. 19 nous consulta

→ nous examina

p. 55 l. 20 ne se ressentait *plus* de se chute

→ ……*pas*……

p. 55 l. 20 Pour moi j'étais très atteint

→ moi, j'étais atteint

p. 55 l. 21 ……revenir avant le soir même.

→ avant le soir.

p. 55 l. 23 ……et m'offrit les remèdes.

→ et me donna divers remèdes

p. 55 l. 23 Je vis bien qu'il me condamnait

→ Je compris bien qu'il……

p. 55 l. 28 (下記二文が平行して書いてある)

je revois cette chambre affreuse.

Cette chambre d'hôtel est affreuse.

p. 55 l. 29 et je la regardais méchamment

→ et je la regardais.

※p. 55 l. 29 Brusquement, je songeai/×dans la chambre voisine/qu'à côté était ma femme.

→ ……je songeai qu'à côté, dans une chambre pareille, était ma femme,……

p. 55 l. 30 et *soudain* j'entendis qu'on parlait

→ et je l'entendis qu'il parlait.

p. 55 l. 31 il *conversait* avec elle

→ il *s'entretenait* avec elle

p. 55 l. 33 la laideur du lieu

→ la laideur de ce lieu

p. 55 l. 35 A présent, près de moi, *sur ses jenux* elle écrivait.

→ A présent, près de moi, elle écrivait

p. 55 l. 37 Je souris, lui dis : 《Oui, guérirai-je ?》

→ Je souris, lui dis *tristement* : 《Guérirai-je ?》

※p. 55 l. 39 ……elle me répondit : 《Tu guériras !》 avec une si passionnée conviction que, presque convaincu, j'eus comme un *subit* sentiment de tout ce que la vie pouvait être, de son amour à elle, et *d'un tel océan de beauté* que les larmes/×emplirent/jaillirent de mes yeux.

→ ……, presque convaincu *moi-même*, j'eus comme un *confus* sentiment de tout ce que la vie pouvait être, de son amour à elle, *la vague vision de si pathétiques beautés*—que les larmes *jaillirent* de mes yeux.

soutenu. あふれるばかり美, un tel océan de beauté が悲壮な美 pathétiques beautés に変えられたことは意味深い。cf. 拙論 p. 39

※P. 56 l. 2 Par quelle *prodige* d'amour/×entouré de quels soins/elle put me faire quitter Sousse, protégé, secouru, veillé……de Sousse à Tunis……

→ Par quelle *violence* d'amour elle put me faire quitter Sousse ; entouré de quels soins charmants, protégé, secouru, veillé……de Sousse à Tunis……

soutenu. prodige から violence に変えられたことは意味深い。cf. 拙論 p. 39

p. 56 l. 6 et/×gardait une chambre d'hôtel/

→ et s'assurait des logements.

soutenu.

※p. 56 l. 7 Je crus plusieurs fois m'arrêter et finir

→ Je crus plusieurs fois *devoir* m'arrêter et finir

《テキスト文》

プレイアード版「レシ, ソチ, ロマン」pp. 374-380

PREMIÈRE PARTIE

1. Le soir même de nos noces nous couchions dans mon appartement de Paris, où
2. l'on nous avait préparé deux chambres. Nous ne restâmes à Paris que le temps qu'il
3. fallut pour d'indispensables emplettes, puis gagnâmes Marseille, d'où nous nous embar-
4. quâmes aussitôt pour Tunis.
5. Les soins urgents, l'étourdissement des derniers événements trop rapides, l'indis-
6. pensable émotion des noces venant sitôt après celle plus réelle de mon deuil, tout cela
7. m'avait épuisé. Ce ne fut que sur le bateau que je pus sentir ma fatigue. Jusqu'alors
8. chaque occupation, en l'accroissant, m'en distrayait. Le loisir obligé du bord me
9. permettait enfin de réfléchir. C'était, me semblait-il, pour la première fois.
10. Pour la première fois aussi je consentais d'être privé longtemps de mon travail.
11. Je ne m'étais accordé jusqu'alors que de courtes vacances. Un voyage en Espagne
12. avec mon père, peu de temps après la mort de ma mère, avait, il est vrai, duré plus
13. d'un mois ; un autre, en Allemagne, six semaines ; d'autres encore—mais c'étaient
14. des voyages d'études ; mon père ne s'y distrayait point de ses recherches très précises ;
15. moi, sitôt que je ne l'y suivais plus, je lisais. Et pourtant, à peine avions-nous
16. quitté Marseille, divers souvenirs de Grenade et de Séville me revinrent, de ciel plus
17. pur, d'ombres plus franches, de fêtes, de rires et de chants. Voilà ce que nous allons
18. retrouver, pensai-je. Je montai sur le pont du navire et regardai Marseille s'écarter.
19. Puis, brusquement, je songeai que je délaissais un peu Marceline.
20. Elle était assise à l'avant ; je m'approchai, et, pour la première fois vraiment, la
21. regardai.
22. Marceline était très jolie, Vous le savez ; vous l'avez vue. J'è me reprochai de
23. ne m'en être pas d'abord aperçu. Je la connaissais trop pour la voir avec nouveauté ;
24. nos familles de tout temps étaient liées ; je l'avais vue grandir ; j'étais habitué à sa
25. grâce.....Pour la première fois je m'étonnai, tant cette grâce me parut grande.
26. Sur un simple chapeau de paille noire elle laissait flotter un grand voile ; elle
27. était blonde, mais ne paraissait pas délicate. Sa jupe et son corsage pareils étaient
28. faits d'un châle écossais que nous avions choisi ensemble. Je n'avais pas voulu qu'elle
29. s'assombrît de mon deuil.
30. Elle sentit que je la regardais, se retourna vers moi.....jusqu'alors je n'avais eu
31. près d'elle qu'un empressement de commande ; je remplaçais, tant bien que mal,
32. l'amour par une sorte de galanterie froide qui, je le voyais bien, l'importunait un
33. peu ; Marceline sentit-elle à cet instant que je la regardais pour la première fois d'une
34. manière différente ? A son tour elle me regarda fixement ; puis, très tendrement, me
35. sourit. Sans parler, je m'assis près d'elle, J'avais vécu pour moi ou du moins selon
36. moi jusqu'alors ; je m'étais marié sans imaginer en ma femme autre chose qu'un
37. camarade, sans songer bien précisément que, de notre union, ma vie pourrait être

1. changée. Je venais de comprendre enfin que là cessait le monologue.
2. Nous étions tous deux seuls sur le pont. Elle tendit son front vers moi ; je la
3. pressai doucement contre moi : elle leva les yeux ; je l'embrassai sur les paupières, et
4. sentis brusquement, à la faveur de mon baiser, une sorte de pitié nouvelle ; elle
5. m'emplit si violemment, que je ne pus retenir mes larmes.
6. «Qu'as-tu donc ?» me dit Marceline.
7. Nous commençâmes à parler. Ses propos charmants me ravirent. Je m'étais fait,
8. comme j'avais pu, quelques idées sur la sottise des femmes. Près d'elle, ce soir-là, ce
9. fut moi qui me parus gauche et stupide.
10. Ainsi donc celle à qui j'attachais ma vie avait sa vie propre et réelle ! L'impor-
11. tance de cette pensée m'éveilla plusieurs fois cette nuit ; plusieurs fois je me dressai
12. sur ma couchette pour voir, sur l'autre couchette, plus bas, Marceline, ma femme,
13. dormir.
14. Le lendemain le ciel était splendide ; la mer calme à peu près. Quelques conversa-
15. tions point pressées diminuèrent encore notre gêne. Le mariage vraiment commençait.
16. Au matin du dernier jour d'octobre nous débarquâmes à Tunis.
17. Mon intention était de n'y rester que peu de jours. Je vous confesserai ma sottise :
18. rien dans ce pays neuf ne m'attirait que Carthage et quelques ruines romaines :
19. Timgad, dont Octave m'avait parlé, les mosaïques de Sousse et surtout l'amphithéâtre
20. d'El Djem, où je me proposais de courir sans retard. Il fallait d'abord gagner Sousse,
21. puis de Sousse prendre la voiture des postes ; je voulais que rien d'ici là ne fût digne
22. de m'occuper.
23. Pourtant Tunis me surprit fort. Au toucher de nouvelles sensations s'émouvaient
24. telles parties de moi, des facultés endormies qui, n'ayant pas encore servi, avaient
25. gardé toute leur mystérieuse jeunesse. J'étais plus étonné, ahuri, qu'amusé, et ce qui
26. me plaisait surtout, c'était la joie de Marceline.
27. Ma fatigue cependant devenait chaque jour plus grande, mais j'eusse trouvé
28. honteux d'y céder. Je toussais et sentais au haut de la poitrine un trouble étrange.
29. Nous allons vers le sud, pensais-je ; la chaleur me remettra.
30. La diligence de Sfax quitte Sousse le soir à huit heures ; elle traverse El Djem à
31. une heure du matin. Nous avons retenu les places du coupé. Je m'attendais à trouver
32. une guimbarde inconfortable ; nous étions au contraire assez commodément installés.
33. Mais le froid !.....Par quelle puérole confiance en la douceur d'air du Midi, légèrement
34. vêtus tous deux, n'avions-nous emporté qu'un châle ? Sitôt sortis de Sousse et de
35. l'abri de ses collines, le vent commença de souffler. Il faisait de grands bonds sur la
36. plaine, hurlait, sifflait, entraît par chaque fente des portières ; rien ne pouvait en
37. préserver, Nous arrivâmes tout transis ; moi, de plus, exténué par les cahots de la
38. voiture, et par une horrible toux qui me secouait encore plus. Quelle nuit ! —
39. Arrivés à El Djem, pas d'auberge ; un affreux bordj en tenait lieu. Que faire ? La
40. diligence repartait. Le village était endormi ; dans la nuit qui paraissait immense on
41. entrevoyait vaguement la masse lugubre des ruines ; des chiens hurlaient. Nous

1. rentrâmes dans une salle terreuse où deux lits misérables étaient dressés. Marceline
2. tremblait de froid, mais là du moins le vent ne nous atteignait plus.
3. Le lendemain fut un jour morne. Nous fûmes surpris, en sortant, de voir un ciel
4. uniformément gris. Le vent soufflait toujours, mais moins impétueusement que la
5. veille. La diligence ne devait repasser que le soir.....Ce fut, vous dis-je, un jour
6. lugubre. L'amphithéâtre, en quelques instants parcouru, me déçut ; même il me parut
7. laid, sous ce ciel terne. Peut-être ma fatigue aidait-elle, augmentait-elle mon ennui.
8. Vers le milieu du jour, par désœuvrement, j'y revins, cherchant en vain quelques
9. inscriptions sur les pierres. Marceline, à l'abri du vent, lisait un livre anglais qu'elle
10. avait par bonheur emporté. Je revins m'asseoir auprès d'elle.
11. «Quel triste jour ! Tu ne t'ennuies pas trop ? lui dis-je.
12. —Non : tu vois : je lis.
13. —Que sommes-nous venus faire ici ? Tu n'as pas froid, au moins.
14. —Pas trop. Et toi ? C'est vrai ! tu es tout pâle.
15. —Non.....»
16. La nuit, le vent reprit sa force.....Enfin la diligence arriva. Nous repartimes.
17. Dès lès premiers cahots je me sentis brisé. Marceline très fatiguée, s'endormit
18. vite sur mon épaule. Mais ma toux va la réveiller, pensai-je, et doucement, douce-
19. ment, me dégageant, je l'inclinal vers la paroi de la voiture. Cependant je ne
20. toussais plus, non : je crachais ; c'était nouveau ; j'amenais cela sans effort ; cela venait
21. par petits coups, à intervalles réguliers ; c'était une sensation si bizarre que d'abord
22. je m'en amusai presque, mais je fus bien vite écœuré par le goût inconnu que cela
23. me laissait dans la bouche. Mon mouchoir fut vite hors d'usage. Déjà j'en avais
24. plein les doigts. Vais-je réveiller Marceline ?.....Heureusement je me souvins d'un
25. grand foulard qu'elle passait à sa ceinture. Je m'en emparai doucement. Les crachats
26. que je ne retins plus vinrent avec plus d'abondance. J'en étais extraordinairement
27. soulagé. C'est la fin du rhume, pensais-je. Soudain je me sentis très faible ; tout se
28. mit à tourner et je crus que j'allais me trouver mal. Vais-je la réveiller ?.....ah !
29. fi !..... (J'ai gardé, je crois, de mon enfance puritaine la haine de tout abandon par
30. faiblesse ; je le nomme aussitôt lâcheté.) Je me repris, me cramponnai, finis par
31. maîtriser mon vertige.....Je me crus sur mer de nouveau, et le bruit des roues
32. devenait le bruit de la lame.....Mais j'avais cessé de cracher.
33. Puis, je roulai dans une sorte de sommeil.
34. Quand j'en sortis, le ciel était déjà plein d'aube ; Marceline dormait encore.
35. Nous approchions. Le foulard que je tenais à la main était sombre, de sorte qu'il n'y
36. paraissait rien d'abord ; mais, quand je ressortis mon mouchoir, je vis avec stupeur
37. qu'il était plein de sang.
38. Ma première pensée fut de cacher ce sang à Marceline. Mais comment ?—J'en
39. étais tout taché ; j'en voyais partout, à présent ; mes doigts surtout..... —J'aurai
40. saigné du nez.....C'est cela ; si elle interroge, je lui dirai pue j'ai saigné du nez.
41. Marceline dormait toujours. On arriva. Elle dut descendre d'abord et ne vit

1. rien. On nous avait gardé deux chambres. Je pus m'élancer dans la mienne, laver,
2. faire disparaître le sang. Marceline n'avait rien vu.
3. Pourtant je me sentais très faible et fis monter du thé pour nous deux. Et tandis
4. qu'elle l'apprêtait, très calme, un peu pâle elle-même, souriante, une sorte d'irritation
5. me vint de ce qu'elle n'eût rien su voir. Je me sentais injuste, il est vrai, me
6. disais : si elle n'a rien vu c'est que je cachais bien ; n'importe ; rien n'y fit ; cela
7. grandit en moi comme un instinct, m'envahit.....à la fin cela fut trop fort ; je n'y
8. tins plus ; comme distraitemment je lui dis :
9. 《J'ai craché le sang, cette nuit.》
10. Elle n'eut pas un cri ; simplement elle devint beaucoup plus pâle, chancela, voulut
11. se retenir, et tomba lourdement sur le plancher.
12. Je m'élançai vers elle avec une sorte de rage : 《Marceline !》 —Allons bon !
13. qu'ai-je fait ! Ne suffisait-il pas que moi je sois malade ? —Mais j'étais, je l'ai dit,
14. très faible ; peu s'en fallut que je ne me trouvasse mal à mon tour. J'ouvris la
15. porte ; j'appelai ; on accourut.
16. Dans ma valise se trouvait, je m'en souvins, une lettre d'introduction auprès d'un
17. officier de la ville ; je m'autorisai de ce mot pour envoyer chercher le major.
18. Marceline cependant s'était remise ; à présent elle était au chevet de mon lit,
19. dans lequel je tremblais de fièvre. Le major arriva, nous examina tous les deux :
20. Marceline n'avait rien, affirma-t-il, et ne se ressentait pas de sa chute ; moi j'étais
21. atteint gravement ; même il ne voulut pas se prononcer et promit de revenir avant le
22. soir.
23. Il revint, me sourit, me parla et me donna divers remèdes. Je compris qu'il me
24. condamnait. —Vous l'avouerez-vous ? Je n'eus pas un sursaut. J'étais las. Je m'aban-
25. donnai, simplement. — 《Après tout, que m'offrait la vie ? J'avais bien travaillé
26. jusqu'au bout, fait résolument et passionnément mon devoir. Le reste.....ah ! que
27. m'importe ? 》 pensais-je, en trouvant suffisamment beau mon stoïcisme. Mais ce dont
28. je souffrais, c'était de la laideur du lieu. 《Cette chambre d'hoûtel est affreuse》 —et
29. je la regardai. Brusquement, je songeai qu'à côté, dans une chamcre pareille, était
30. ma femme, Marceline ; et je l'entendis qui parlait. Le docteur n'était pas parti ; il
31. s'entretenait avec elle : il s'efforçait de parler bas. —Un peu de temps passa ; je dus
32. dormir.....Quand je me réveillai, Marceline était là. Je compris qu'elle avait pleuré.
33. Je n'aimais pas assez la vie pour avoir pitié de moi-même ; mais la laideur de ce lieu
34. me gênait ; presque avec volupté mes yeux se reposaient sur elle.
35. A présent, près de moi, elle écrivait. Elle me paraissait jolie. Je la vis fermer
36. plusieurs lettres. Puis elle se leva, s'approcha de mon lit, tendrement prit ma main :
37. 《Comment te sens-tu maintenant ? 》 me dit-elle. Je souris, lui dis tristement :
38. 《Guérirai-je ? 》 Mais, aussitôt, elle me répondit : 《Tu guériras ! 》, avec une si
39. passionnée conviction que, presque convaincu moi-même, j'eus comme un confus
40. sentiment de tout ce que la vie pouvait être, de son amour à elle,
41. la vague vision de si pathétiques beautés, —que les larmes jaillirent

1. de mes yeux et que je pleurai longuement sans pouvoir ni vouloir m'en défendre.
2. Par quelle violence d'amour elle put me faire quitter Sousse; entouré de quels
3. soins charmants, protégé, secouru, veillé.....de Sousse à Tunis, puis de Tunis à
4. Constantine, Marceline fut admirable. C'est à Biskra que je devais guérir. Sa
5. confiance était parfaite; son zèle ne retomba pas un instant. Elle préparait tout,
6. dirigeait les départs et s'assurait des logements. Elle ne pouvait faire, hélas! que ce
7. voyage fût moins atroce. Je crus plusieurs fois devoir m'arrêter et finir. Je suis
8. comme un moribond, j'étouffais, par moments perdais connaissance.—A la fin du
9. troisième jour, j'arrivai à Biskra comme mort.